

## 論旨

1155189 渡邊真希

この論文は、資本主義社会において人々が理想とされる「モデル」へと近づこうとしすぎるあまり、自身の選択という考えることをやめている事実をファストファッションを通じ論じている。人間は、「個性的でありたい、自分自身のアイデンティティを確かめたいという欲求を持っている」「社会に認められたい欲求を持ち、社会を志向する存在である」という2つの性質を持っている。「モデル」に近づこうとする理由は後者にあり、皆から良い評価を受けることができる「モデル」を模倣することであたかも自分自身が好評価をそのまま受けたような気になるためだ。ファッションは絶えず「モデル」の差異化を続けてきた。個性を求める人間の側面がよく出る部分である。新しいものは次々に「モデル」化され人々はまたその「モデル」を買い換えていく。この繰り返しが加速し、大量生産技術の進化が生み出した結果がファストファッションである。価格とともに一着一着の質が落ちていくことに気づかず、人々はぱっと見の「モデル」を追い続け、使い捨てるファッションが街にあふれる。捨てきれない衣服は世界中に運ばれゴミ山を形成し、捨てるためのファッションを作る人々は低賃金労働の中、健康さえ犠牲にしている。私たちのファッションはどこに行ってしまったのだろうか。自分の愛せるファッションさえ自己選択できなくなっている。そこで、コンゴのサプールの実践している SAPE という生き方を参考にファッションを選ぶということについて考えてみた。彼らの収入は最低レベルだが給料何ヶ月分にも値する超一流のファッションしか身につけない。彼らは平和を愛し他人に対し尊敬の念を忘れずに個性というものを重視している。そんなサプールは何よりも着こなしを重視している。言い換えると「他にはない自分らしいスタイル」というものだ。すでに誰かが作り上げたいいとされるものではなく、自分自身が作り上げたいものをファッションで表現するのである。サプールは社会的にも評価を得ているし、サプールのメンバーは各々自分のファッションセンスに自信を持ち、おしゃれを楽しんでいる。これが本来ファッションのあるべき姿だと思う。「モデル」を追っても自身の根本的な満足（アイデンティティの確立）には繋がらないし、ファッションにおける「正解」はもともと一つではない。様々なスタイルの良いところを互いに認め、自身も自分の考える「私のスタイル」を貫くことが幸せなファッションの入り口とな

る。